

教育長 殿

宮城県古川黎明中学校
校長 三宅 裕之 印

令和7年度学校評価報告書

1 本年度の重点目標

- (1) 生徒が安心して学べる学校・学年・学級づくり
 (2) 違いを認め尊重しあう社会性の育成及びいじめを生まない心の醸成
 (3) 中高一貫の強みを生かし、生徒が主体となる学習活動、特別活動等の充実
 (4) コンピテンシーベースのカリキュラム構築とカリキュラムマップの開発・活用
 (5) 探究推進プロジェクト及び授業づくりプロジェクトを活用した学習活動の推進
 (6) 生きづらさを抱えた生徒への支援の充実
 (7) 授業・特別活動と課外活動を関連付け、生徒の進路選択と希望進路の実現を支援

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

A 達成している B おおよそ達成している C あまり達成していない D 達成していない

評価分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学習指導	① 個別最適な学びへの支援と課題を抱えた生徒への学習支援	A	ICTの効果を最大限に活用し、生徒個々の状況に応じた学習課題を設定した。また、主に登校していない生徒の支援として、アセスメントに基づいたケース会議を開催し、学習場所に依らない同時双方向型遠隔授業を実施した。今後は、支援の内容が適切だったかについて適時に評価し、より充実した支援が図られるようにする。	A	A
	② 生徒による授業評価に基づく授業改善	B	生徒による授業評価を年2回(6月・12月)実施した。内容は、数値による必須の回答と、自由記述による任意回答からなる。結果は教員個人にフィードバックし、授業改善が図られるようにしている。一部の教科では、授業改善策について教科会を開くなど共有が図られたが、今後は学校全体で、授業改善の意識が醸成されるような体制を構築する。	B	A
学校関係者評価委員会における意見	生徒一人一人への学習課題の提供や登校支援など、きめ細かい取組がなされている。また、課題を抱える生徒への支援についても適切に取り組みされているなど、成果が出ている。評価の仕組みについては、アンケート回答の数値以外にも取組の成果が把握できるとよい。また、学習支援効果の可視化としても、アンケート以外で把握する仕組みがあるとよい。適切な評価の仕組みにより、早急に評価・検討を行い、引き続き生徒の意欲が醸成されるような体制づくりに取り組んでほしい。				
生徒指導	① 教育相談の充実	A	月1回の学校生活アンケートや長期休業明けのストレスチェック、並びに年2回の二者面談を例年通り実施した。加えて、1学年では、保護者と担任が早期に関係を構築し、生徒の情報共有が円滑に進むことをねらいとして夏季休業中に保護者面談を実施した。今後は他学年での早期の保護者面談も検討しつつ、SCやSSWとの連携も図りながら、教育相談の充実を図っていく。	A	A
	② 行きたくなる学校づくり	B	よりよい学校生活を送るために、自治的な組織を形成し、互いの意見や経験を尊重しあえることができるよう、支援を行った。また、生徒がこれまで以上に活躍できる場を多く設定し、生徒自らが自己有用感を感じられるような場面を設定する。	B	B
学校関係者評価委員会における意見	積極的な生徒指導の考え方が取組に表れている。黎明生として活動の機会を増やし、楽しい学校生活につなげてほしい。教育相談については、相談体制が充実している。引き続き充実を図り、保護者との連携をお願いしたい。行きたくなる学校づくりについては、教員側の具体的な取組案があると、さらに改善が進む。「主体的な活動」が主体的に始まるような仕掛けを教員側が作ってほしい。そして、成長過程にある生徒のストレスや不安を軽減させ、魅力ある学級・学年経営の充実を図ってほしい。				
進路指導	① 進路目標の達成に向けて	A	総合的な学習の時間で、各学年がそれぞれの発達段階に応じてキャリアに関する学習を行った。また、今年度から、中学校の進路部からキャリア通信を発行し、進路目標達成についての意識の醸成を図るとともに、保護者にも、中高6年間を見通した進路を考えるきっかけづくりを行った。今後も継続して発行していく。	A	A
	② 進路指導について	B	昨年度に続き、学力推移調査の結果について、外部講師を招き生徒向けの分析会を実施した。中高6年間、同一の指標を用いた分析を行うことで、高校卒業後の進路について我がこととして考えるきっかけとすることができた。今後は、総合的な学習の時間の計画にしっかりと位置づけ、本校の進路学習のスタンダードとしていく。	A	A
学校関係者評価委員会における意見	中高一貫教育の利点を生かし、キャリア情報を早期に提供するなど、指導や助言の成果が表れている。大学進学においては、今後、総合型選抜・推薦への応募が増えると思われることから、総合的な学習を活用し、キャリア学習を進めていくとよい。今後は、進路指導やSSHを中心とし、中高一貫校としてのイベント等、連携した活動の一層の充実を図ってほしい。				
中高一貫教育	① 授業づくりプロジェクト	B	本校の探究学習のキーワードである、「気づき」「問い」「確かめ」の探究ループを位置づけた。各教科及び総合的な学習の授業の提供や互見により、授業アイデアを蓄積した。一単位時間の中でも、的を絞った部分を参観することにより、授業提供側、見学者のどちらも参加しやすくなった。今後も授業アイデアの蓄積を行っていく。	B	B
	② SSHをはじめとする中高連携について	B	中学3年生と高校1年生が合同で実施する大崎耕土フィールドワークは黎明のスタンダードとなり、今年度も滞りなく実施した。SSH以外でも、ヒブリオバトルで高校生の発表を間近で聴講したり、土曜塾のAll English Dayでは、高校生のボランティアの協力を得ながら活動を行ったりした。今後も継続的に実施していく。	A	A
学校関係者評価委員会における意見	SSHの活動を積み重ねることで、生徒の豊かな発想と確かな研究実践が見られ、今後も期待が持てるなど、併設型校の強みを生かした中高で連携した行事があることがよい。日常的な連携を活発にする等、中高の交流機会をより増やしてほしい。生徒の自尊感情へのケアから集団指導として体制づくりが進められており、進路指導やSSHを中心に、一貫校としてのイベント連携の一層の充実を図ってほしい。				

3 次年度の課題と改善方策

次年度の課題	改善方策
① 学習指導	学校評議員から、評価の仕組みについて助言をいただいた。アンケート回答の数値による評価のみに頼らず、多面的に評価ができる仕組みを設定するとともに、改善策を学校全体で共有する体制確立に向け、取組を進める。
② 生徒指導	「生徒主体の活動」を生徒が作り上げる過程に、教員がどう関わるかについて、次年度の課題とする。特に、発達段階にある中学生を指導・支援する立場として、教員側が意図をもって接することが重要である。保護者との連携はもとより、リアルタイムで生徒の状況を把握し、適切な支援を行えるような体制づくりを進める。
③ 中高一貫教育	「行事での中高連携」から「日常での中高連携」に徐々に移行する流れを確立する。SSHでの取組はもとより、今年度交流を行った授業の他にも、中高連携を充実させ、高校生の姿が身近にある中学校を体現する。